

「グリーン・ウォール」の創生  
グヌングデ・パングランゴ国立公園  
住民参加型森林再生プロジェクト

現地からのお便り

2014年5月7日  
コンサベーション・インターナショナル

森林再生事業の進捗

昨年12月、計画していた300ヘクタールへの苗の植え付けが完了しました。2008年から、参加農家や国立公園レンジャーと一緒に着実に広げてきた植林地です。植えられて既に5年が経つ木々は、たくましく成長しました。植えられて間もない苗は、まだまだ世話が必要です。毎月、見回り、小さな苗の成長を妨げる雑草とりなどを続けています。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

コミュニティの生計向上

雨が少なすぎたり、多すぎたり、自然に頼った農業にはリスクが付き物ですが、プロジェクトに参加する農家の多くは、いざと言う時に頼れる貯えがほとんどありません。プロジェクトでは、農家の収入源を増やすため、野菜の栽培、淡水魚の養殖、ヤギの飼育の支援を続けています。市場で良く売れると農家を選んだキュウリ、インゲン、ショウガが収穫され、農家の家計を支えています。プロジェクトで水源からひいたパイプで運ばれてくる水で蘇った養殖池では、魚が順調に大きくなっています。また、ヤギの赤ちゃんも産まれました。野菜も魚もヤギも大きく育ちますように！



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

### グリーン・ドクターと移動式環境教育

1月～3月、小学校4校、中学校2校、高校1校を地元の保健師さんと一緒に訪問しました。それぞれの学校で、約50名の生徒たちが、スライド、映画、ゲーム、クイズ、音楽、話し合い、本などを通じて環境、健康、そして衛生について学びました。子供たちが手にしているのは、みんなが大好きなジャワギボンの写真です。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

### プロジェクトの振り返り

大事な会議が二つありました。1月に開いた地元コミュニティのリーダーとの会議と3月に開いた国立公園スタッフとの会議です。各回約50人が参加した会議では、プロジェクトの取り組みを振り返り、今後の計画について話し合いました。

地元コミュニティのリーダーからは、生計向上を始めとしたプロジェクトの取り組み、そして以前は遠い存在だったコミュニティと国立公園をつないだグリーン・ウォール・プロジェクトという「橋」への感謝が伝えられました。地元コミュニティと国立公園の両者から、このプロジェクトをさらに拡げていきたいという声が上がりました。

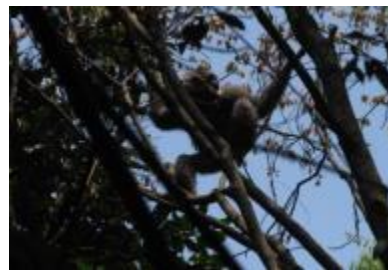


(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

左：コミュニティとの会合、右：国立公園局との会合

### ギボン一家、森に帰る

2014年3月27日、4匹のジャワギボンの一家が森に帰りました。ジョボとボンボンがジャワ・ギボン・センターに保護されたのは6年前。6年間のリハビリを通じて、二匹は森で生きる術を身につけ、カップルになり、そして2010年にはヤニを、2013年にはユディを授かりました。



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

左：ジョボ、中央：ボンボンと末っ子ユディ、右：ヤニ

一家の新たな住処は、ここから80キロほど離れたマラバー山です。マラバー山での1ヶ月の慣らし期間を経て、一家は、森に帰って行きました。毎朝、彼らの歌がマラバー山の森に響いています。ジョボ、ボンボン、ヤニ、ユディ、元気でね！



(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

慣らし用の檻から森へ

## 看板

Sordog 村に設置されていた看板と昨年 11 月に新たに Panyusuhan 村に設置された看板は、共に良好な状態です。



2014 年 1 月

2014 年 2 月

2014 年 3 月

(上、Sordog 村の看板；下、Panyusuhan 村の看板)

(c) Conservation International, Photo by Anton Ario

※画像および文章の無断転用はご遠慮下さい。